

# 誤用とされる敬語についての正誤意識の変化 — 東京都での多人数経年調査から —

尾崎喜光

## 1. はじめに

文化庁文化庁国語課が全国の16歳以上の男女約2,000人を対象に2020年2月～3月に実施した「国語に関する世論調査」によると、「今の国語は乱れていると思うか」という質問に対し「非常に乱れていると思う」ないしは「ある程度乱れていると思う」と回答した人の合計は66.1%にのぼる（文化庁文化庁国語課編2020）。この質問は、約20年前の1999年度調査から計5回繰り返しのなされている。上記の数値は一貫して減少傾向にあるものの、直近の調査でも3人のうち2人は「乱れている」と感じていることがわかる。

上記の回答をした人に対してはさらに「どのような点で乱れていると思うか」について、提示した8つの選択肢から3つまでを選ばせている。ほぼ毎回トップとなるのは「敬語の使い方」であり、2020年調査では63.4%となっている。言葉の乱れの中でも敬語の乱れは、多くの国民の間で意識され続けていることがわかる。

そこで本稿では、東京都在住者を対象に筆者らが最近実施した無作為抽出多人数調査の調査項目のうち、敬語の誤用に関する項目を取り上げ、そのおよそ20年前にはほぼ同様に調査した結果と比較してどのような変化が見られるかを分析する。

## 2. 調査概要

本稿で分析対象とするデータは、東京都において実施した次の2つの調査により得たものである。

(1) 第1回調査……1997年秋実施、20歳～69歳の男女1,013人が回答<sup>注1</sup>

(2) 第2回調査……2018年10月～2019年3月実施、同様の1,049人が回答<sup>注2</sup>

このうち1997年実施の第1回調査は、国立国語研究所が郵送アンケート調査により実施したものである（企画・立案・実施の主担当は筆者）。

一方、2018-19年実施の第2回調査は、筆者を代表者とする科学研究費補助金を得て実施したものである。実査は調査会社に委託し、調査員の個別訪問面接聴取法により回答を得た。

いずれの調査も、調査地点についても回答者についても、東京都の代表性が確保されるよう配慮した上で無作為に選び、できるだけ東京都の縮図が得られるようにした。

調査方法については、郵送調査と面接調査という違いはあるが、質問文および選択肢は基本的に変えずそろえている。すなわち、両調査はほぼ同様に行った調査として経年比較できるものとした。なお、調査の詳細については尾崎喜光（2021、2022a）で説明している。

### 3. 分析

敬語に関する一般書である尾崎喜光（2009）および尾崎喜光（2022b）で指摘したように、敬語の誤用は「形式面での誤用（逸脱）」と「運用面での誤用（逸脱）」に大別できる（「敬語」に関する誤用を拡大すれば、さらに「内容面での誤用（逸脱）」もある）。これは、「敬語の乱れ」についての大石初太郎（1986）の分類と基本的に同じである。前者は、敬語としての形がそもそも誤りであるというものであり、尊敬語のつもりで使った表現が、形としてはじつは謙讓語（平成19年2月2日の文化審議会答申「敬語の指針」の分類によれば「謙讓語Ⅰ」）になっているようなものも含まれる。これに対し後者は、敬語の形という点では問題ないが、通常は使えないと考えられる関係にある人物に対し特定の敬語表現（ないし是非敬語表現）を使うという点に問題がある誤用である。したがって、前者の誤用は正誤の判断が明確であるのに対し、後者の誤用は人により判断が分かれうる。後者は「正誤」と呼ぶよりも「適不適」と呼ぶ方がより適切かもしれない。従来の基準からすれば、その表現をその人物に対し使うのは「誤用」とされるものである。

以下の分析では、誤用を大きくこの2つに分けて見て行く。

#### 3.1. 形式面での誤用（1）—「御～する」のバリエーションを尊敬語の意識で使う誤用—

「御～する」「お～する」は動詞を謙讓語Ⅰにするパターンである。たとえば「案内する」は「御案内する」、「送る」は「お送りする」となる。

ところが、特に「案内する」等の漢語サ変動詞は、尊敬語のつもりで「御案内してください」と言ってしまうことがある。もっとも、案内される人物を高めるために、話し相手の同僚等の「案内する」という動作を低めて「御案内してください」と言うのであれば問題ない。ここではそうした状況ではなく、「案内する」という相手の動作を高める「御案内になってください」という意味での「御案内してください」である。

このような誤用が生じるのは、尾崎喜光（2009、2022b）で指摘したように、「御案内する」が、「御 [案内] する」ではなく「[[御案内] [する]]」と分析されるためであろう。

「食する」などと異なり「案内する」は、「案内」と「する」が密着してははや切り離せないほど強く結びついているわけではなく、比較的ゆるやかな結びつきである。そのため「案内する」は「案内+する」であるという意識が現在でも残っていると考えられる。しかし「案内」のままでは丁寧さが欠けるという意識から、「案内」を「御案内」とし、それに「する」を付けてできたのが「御案内する」なのであろう。助詞「を」を含む「御案内をする」という表現が存在しうることから、こうした分析意識が人々の中にあることはおおいに考えられる。そして、日常的な話し言葉では助詞「を」がしばしば省略されるため「御案内する」となったものであろう。

約20年の間隔を置いて2回実施した東京都での調査では、こうした表現についての回答者の正誤意識を質問した。

回答者に提示した表現は、行為の及ぶ先の相手が想定されないことからそもそも謙

謙語 I になりえない「卒業する」と「利用する」とした。

「卒業する」は、「ご卒業する」とした上で「れる／られる」の尊敬助動詞を下接した「ご卒業される」で質問した。公的な場での人物紹介で実際にしばしば聞かれる表現である。実際に提示した表現は「(先生は)ご卒業されました」である。本来の正しい形は、「ご～になる」という尊敬語のパタンを用いた「ご卒業になりました」である。なお、この表現は、1997年調査では調査項目としていないことから2018-19年調査の結果のみを示す。

一方、「利用する」は、「ご利用する」とした上でこれを可能形にし、さらにそれを否定形にした「ご利用できない」で質問した。実際に提示した表現は「(この切符は)ご利用できません」である。本来の正しい形は、これも「ご～になる」という尊敬語のパタンを用いた「ご利用になれません」である。

2018-19年調査で回答者に提示した表現と選択肢は次のとおりである。

(19) 次の言い方について、下線の部分に注目し、おかしな言い方だと思うかどうか、ひとつずつ見ながら答えてください。カードは2枚続いています。

(ク) (司会者が先生の紹介で)

先生はアメリカの大学をご卒業されました。

1. おかしい
2. おかしくない

(ケ) この切符はご利用できません。

1. おかしい
2. おかしくない

回答者には、表現(文)と選択肢が書かれたカード型の回答票を手元に置いてもらい、それを見ながら回答してもらった。「ひとつずつ見ながら」という指示は、1枚の回答票に複数の表現(文)が記されていることから、見落としを防ぐための注意喚起である。問19で問うた表現は9つあり、回答票が2枚にわたるため、カードをめくる際に飛ばさないよう「カードは2枚続いています」と注意喚起した。

なお、1997年にも調査した(ケ)の指示文と例文は、これと若干表現が異なるが、回答を左右するほどのレベルではないと判断される。ポイントとなる箇所には同様に下線を付した上で、そこに注目するように指示もしている。選択肢は全く同じである。

### (1) 「ご卒業されました」

2018-19年の調査でのみ質問した「ご卒業されました」について、「おかしくない」と回答した人の割合を年齢層別に示したのが図1-1、生年層別に示したのが図1-2である。以下ではこの数値を「許容者率」と呼ぶ。1997年調査との比較がないため図1-2は不要と感じられるかもしれないが、今後の継続調査との比較に備えて示した。

なお、本稿では、両調査とも無回答は母数から除いて許容者率を計算している。1997年の調査結果を示した尾崎喜光（1999、2000、2009）ではそうした調整をしていないため、本稿における数値と若干異なる。

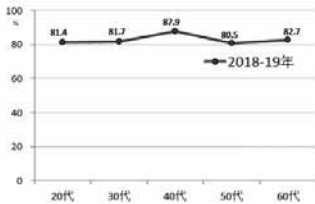


図 1-1 「ご卒業されました」の許容者率（年齢層別）

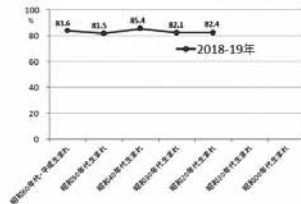


図 1-2 「ご卒業されました」の許容者率（生年層別）

図 1-1 によると、形式面での誤用とされる「ご卒業されました」を、どの年齢層でもおよそ 8 割が「おかしくない」としている。まだ完全に許容されたとは言えない状況であるが、問題のない敬語表現としてかなり定着していることがわかる。謙譲語Ⅰの「ご[卒業]する」ではなく、「[ご卒業](を)[する]」という分析意識を持つ人がどの年齢層にも多くいるであろうことが、この背景にあるものと考えられる。

図 1-2 によりこれを生年層別に見てもほぼ同様であり、どの生年層においてもおよそ 8 割が「おかしくない」としている。

## (2) 「ご利用できません」

「ご利用できません」について、「おかしくない」と回答した人の割合を年齢層別に示したのが図 2-1、生年層別に示したのが図 2-2 である。

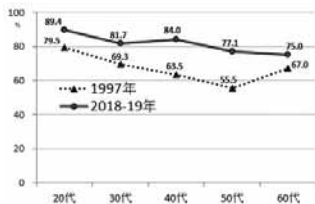


図 2-1 「ご利用できません」の許容者率（年齢層別）

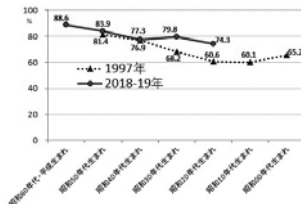


図 2-2 「ご利用できません」の許容者率（生年層別）

図 2-1 により年齢層別に見ると、1997年の時点でも許容者率はおよそ 6～8 割と比較的高かったが、その約 20 年後の 2018-19 年調査ではどの年齢層にも増加が見られ、許容者率は 8 割前後となっている。この表現が問題のない敬語表現として着実に受け入れられていることがわかる。年齢層別に比較すると、いずれの調査でも数値は若年層に向けて高くなる傾向が見られる。現在定着の過程にあることが年齢差として表わ

れているものと考えられる。いずれは正しい表現として完全に定着すると考えられるが、その背景には、謙讓語Ⅰの「ご[利用]できる」ではなく、「[ご利用](が)[できる]」という分析意識が働いているものと考えられる。

一方、図2-2により、両調査で生年層が重なる部分を見ると、年齢層別分析で確認したほどの大きな変化は見られない。同一個人を追跡調査したわけではないため推測にとどまるが、コーホート(同時期出生集団)で大きな変化が見られないということは、約20年経っても個人レベルでは正誤意識が変化しない人が多いこと、時代の趨勢はこうした表現を受け入れる方向に変化しても、個人レベルでは正誤意識が一定しており変わらない人が多いということを示唆する。それが顕著なのは昭和50年代生まれと昭和40年代生まれである。それよりも前に生まれた昭和30年代生まれと昭和20年代生まれには1割程度の上昇が見られる。約20年前の時点で許容者率が6～7割にとどまったこうした生年層では、時代の趨勢に呼応する方向で正誤意識を変える個人が多少存在するということであろう。

### (3) 先行研究で得られた知見との関係

熊本市の公立専門学校(93人)と社会人(33人)を対象に1997年にアンケート調査を実施した平井淑子(1998)は、「お呼びして(～)」「お待ちして(～)」「お伺いして(～)」を尊敬語として使うことを誤りとした者は50%～90%おり、こうした表現についての規範意識は高いと考えられるとする。文化庁文化部国語課が2014年に実施した「国語に関する世論調査」でも、先生に対する「こちらでお待ちしてください」について「気になる」と回答した人は73%いる(文化庁文化部国語課編2014)。「乗車する」のような漢語動詞と異なり「待つ」のような和語動詞は、「お待ち+を+する」のような分析意識を持ちにくいことが、「気になる」に大きく傾く要因の一つとなっているのではないかと考えられる。

これに対し漢語動詞は許容率が高い傾向が見られる。文化庁文化部国語課が2004年に実施した「国語に関する世論調査」によると、「御出発される」を「気にならない」と回答した人は43%である(文化庁文化部国語課2004)。ただし、8年前と比較すると、「気にならない」は2割近く低下し、逆に「気になる」は1割近く増加しており、正誤意識がこの間強まっているのかもしれないとする。また、2005年実施の「国語に関する世論調査」によると、「御乗車でできません」を「正しく使われていると思う」と回答した人は59%で多数派となっている(文化庁文化部国語課編2005)。ただし7年前の調査結果(文化庁文化部国語課編1998)と比較すると、数値は4ポイント低くなっているとする。

このように見ると、特に漢語動詞については、「御～する」やそのバリエーションである「御～される」「御～できる」は、多少の変動を伴いつつ、全体としては全国で許容される方向に変化しており、それが東京都でも該当するということであろう。

## 3.2. 形式面での誤用(2) 一動詞・補助動詞の「おる」を尊敬語の意識で使う誤用一

「おる」は、西日本では単に生き物が存在することを表わす動詞として、共通語の「い

る」と同義で用いられているが、共通語においては、「いる」と対比される謙譲語として用いられている。謙譲語であるならば、尊敬語で表現すべき人物に対し使うのは誤用ということになる。特に「おる」に「れる／られる」の尊敬語を下接した「おられる」や、それを補助動詞として用いた「～ておられる」（「～でおられる」）は、謙譲語に尊敬語をつなげた表現になることから、理屈としては語形としてそもそもありえないということになる（形式面での誤用）。しかしながら、現実にはこうした表現が用いられることがあることから、これらの表現についての正誤意識を尋ねた。

質問文と選択肢は次のとおりである。動詞で表現される人物は、一般に尊敬語を用いて表現される（少なくとも低めて表現しない）、話し相手でもある「先生」とした。

- (オ) 先生、あしたは学校におりますか？  
 1. おかしい 2. おかしくない
- (カ) 先生、あしたは学校におられますか？  
 1. おかしい 2. おかしくない
- (キ) 先生、あしたは学校に来ておられますか？  
 1. おかしい 2. おかしくない

### (1) 「おりますか？」

「おりますか？」について、「おかしくない」と回答した人の割合を年齢層別に示したのが図3-1、生年層別に示したのが図3-2である。

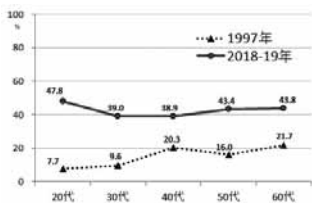


図3-1 「おりますか？」の許容者率（年齢層別）

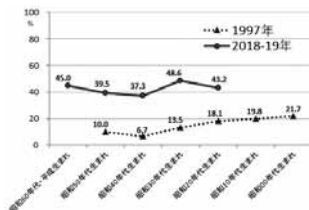


図3-2 「おりますか？」の許容者率（生年層別）

図3-1により年齢層別に見ると、1997年の時点ではわずか1～2割にとどまっていた許容者率は、2018-19年にはどの年齢層にも数値の大幅な上昇が見られ、許容者率はどの年齢層でも4割前後となっている。1997年の時点では、若年層になるほど許容者率が低下したことから、許容されない方向に変化することを予測したが、実際は逆であった。ただし完全に許容されるまでにはまだ相当時間を要しよう。

学校の先生に対する「おりますか?」が許容される方向に変化しつつある背景には、「おる」は動作主を低めて表現するというよりも（その場合は「おる」は話し手や話し手側の人物の動作にしか使えない）、「いる」をかしくまって表現する「かしくまり語」と意識されているためではないかと考えられる。「敬語の指針」では「おる」を「丁重語」に分類しているが、それと重なるところが大きい。ただし、「丁重語」の「丁重」という言葉には、物腰や言葉遣いの柔らかさというニュアンスが感じられる。「おりますか?」の「おる」の中心的な敬語的機能は、「かしくまった気持ちで述べる」という「述べ方の硬質性」にあるように感じられる。ここから「かしくまり語」とした。

図3-2により生年層別に見ると、両調査で重なる生年層全てで数値の大幅な上昇が認められる。コーホートにおいて大きな変化が見られるということは、約20年たったとき、個人レベルで正誤意識が変化した人が一定の割合存在すること、すなわち時代の趨勢に従う形で個人レベルでも正誤意識を変えた人が、どの年齢層にも一定の割合いるということを示唆する。先生に対する「おりますか?」は、社会全体として許容する方向に変化しているが、その要因として、個人の意識の変化が少なからざる度合いで寄与していることが考えられる。

## (2) 「おられますか?」

「おられますか?」について、「おかしくない」と回答した人の割合を年齢層別に示したのが図4-1、生年層別に示したのが図4-2である。

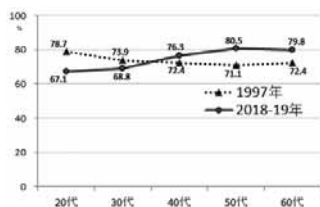


図4-1 「おられますか?」の許容者率 (年齢層別)

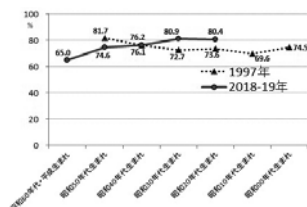


図4-2 「おられますか?」の許容者率 (生年層別)

図4-1により年齢層別に見ると、2回の調査で大きな変化は見られない。どの年齢層でも7~8割の高い許容者率が維持されている。「かしくまり語」としての「おる」に尊敬語を付加した表現と見るのであれば、言葉の構成として何ら問題ない、むしろ尊敬語のない「おりますか?」よりも先生に対する表現として適切であるという意識が、高い許容者率の背景にあるものと考えられる。

図4-2により生年層別に見た場合も、多少の数値の変化はあるものの、2回の調査で基本的に大きな変化はなく、どの生年層でも8割前後の高い許容者率が維持されている。約20年経ても、「おりますか?」についての正誤意識が変化した人は少ないと推測される。

### (3) 「来ておられますか？」

「来ておられますか？」について、「おかしくない」と回答した人の割合を年齢層別に示したのが図5-1、生年層別に示したのが図5-2である。

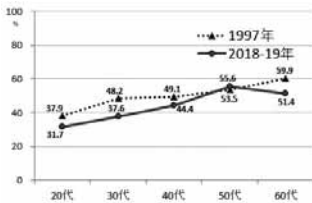


図5-1 「来ておられますか？」の許容者率(年齢層別)

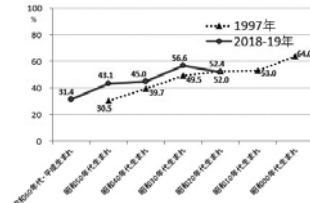


図5-2 「来ておられますか？」の許容者率(生年層別)

図5-1により年齢層別に見ると、先に見た「おられますか？」と同様に、2回の調査で数値に大きな変化は見られない。共通語としてより適切な表現は、尊敬語を含む「(～て) いらっしゃる」であるが、補助動詞としての「(～て/～で) おられる」は、以前から実質的に正用として用いられ定着している。皇室関係の民放のテレビ番組でも、皇室関係者の活動を紹介するナレーションで「〇〇に取り組んでおられました」と補助動詞「おられる」を用いている。補助動詞としての「おる」も「かしこまり語」と意識され、それに尊敬語を付加したのだから言葉の構成として何ら問題ないと考えの人が、本動詞に先駆けて多かったのではないかと考えられる。そのようなことから、許容者率は「おられますか？」よりも高いことが期待されたが、2回の調査ともそうはなっていない。これについては明確な理由は不明ながら、尾崎喜光(2009)で指摘したように、敬語を外した「(学校に) 来ている」という表現自体に多少の不自然さがあり(より自然な表現は「(学校に) 来る」)、そこに反応して「おかしい」と感じ、そのため「おかしくない」の数値が低くなった可能性が考えられる。

なお、1997年調査では、若年層に向けて許容者率が減少する傾向が見られた。この傾向は約20年後にも見られる。こうした状況は、許容者率の減少が年齢差に反映している場合が少なくないが、実際には、約20年後に許容者率は減少していない。そうすると、この年齢差は、いつの時代でも「～ておられる」は、ある程度年齢が高くなってから自分でも使い始めることから当然許容も始める加齢変化という要素が含まれている可能性が考えられる。図5-2の昭和30年代～昭和50年代生まれを見ると、大きな数値ではないものの、上昇が見られる。1997年調査で20～40代であった者であるが、こうした比較的若い年齢層の中には、その後40～60代になってから、この表現を問題ないとする人も含まれているのかもしれない。本当にそのようなことがあるのかについては今後精査したい。

図5-2により生年層別に見ると、2回の調査とも新しい生年層になるほど数値が減少している。それからすると、この表現は許容されない方向に変化していると考えられるが、図5-1で確認されたように、実際にはそうならないのは、これを許容す



る方向での加齢変化が、衰退を相殺する形で生じているためという可能性が考えられる。これについても今後さらに考察を深めたい。

#### (4) 先行研究で得られた知見との関係

埼玉県にある大学で在学学生を対象に1992年・93年にアンケート調査した尾崎喜光(1994)は、「おりましたら(事務室までおいでください)」の正誤意識を調査している。女子学生63人の回答を分析したところ95%が「正しくない」と回答した。調査時期が近い東京都での1997年調査で「おりますか?」の許容率が1~2割にとどまったこと、特に20代の数値が1割に満たないことと数値はよく似ている。

また、文化庁文化語国語課が1995年に実施した「国語に関する世論調査」では、「○さん、おりましたら御連絡ください」について「気になる」と回答した人は56%と過半数となっている(文化庁文化語国語課編1995)。

調査対象者や問い方の違いがあるため数値は調査間で異なるが、「おる(おります)」を「正しくない」ないしは「気になる」と意識している人がかつては多かったことがわかる。それが、東京都での2回の調査を比較すると、許容率は大きく増加している。このことから、「おる」は相手を低めるといふよりもかまこまって述べる表現というように、現在意識が変化しつつある可能性が考えられる。

上記の尾崎喜光(1994)の調査では、「正しくない」と回答した者に対しては正しい表現への修正まで求めているが、「おりましたら」の「おる」に尊敬助動詞を下接した「おられましたら」に修正した者が約1割いた。このことから、「おる」は正しくないがこれを尊敬語にした「おられる」であれば問題ないと意識している回答者が少数ながら確かにいることが確認される。

この「おられる」については、言葉の作りという点から問題ありとされることがよくあることから、さまざまな調査や解説がある。

文化庁文化語国語課が1999年に実施した「国語に関する世論調査」によると、補助動詞としての「おられる」を含む「(先生は)心配しておられたよ」について「気にならない」と回答した人は52%と半数を超え、「気になる」を1割ほど上回っているとす(文化庁文化語国語課編1999)。また、同じく2005年に実施した「国語に関する世論調査」によると、本動詞としての「おられる」を「正しく使われていると思う」と回答した人は58%と多数派となっている(文化庁文化語国語課編2005)。本動詞にしても補助動詞にしても、「おられる」は受け入れられる傾向が見られる。

20代と50代の社会人男女400人を対象に2021年にアンケート調査を実施した田邊和子・小池恵子(2022)は、補助動詞としての「おられる」を含む「悩んでおられました」「(ボートを)漕いでおられます」「喜んでおられます」は、20代では女性よりも男性の方が「聞く」「使う」ともに有意に高いこと、こうした表現は20代の男性に拡大する傾向が見られることを指摘する。女性よりも男性で好まれるのは、「おられる」に伴う表現の硬質性が関係していそうである。

近藤雅之(2020)は、本動詞としての「おる」を含む「おられる」について、辞書記述や政府刊行物での説明、先行研究等を広範に確認・整理するとともに、各種デー

タから用例を得、実際の使用実態に即して再定義を行っている。「おられる」は書籍における書き言葉や国会などのフォーマルな場での話し言葉として使用されることが多いこと、また「いらっしゃる」と比べ「神」や「陛下」など高い敬意を表すべき対象を主語に取る例が多いこと等から、「おられる」は「いらっしゃる」よりも書き言葉的で固い印象を与える表現であるとし、辞書等での記述や実際の使用実態から「おられる」は正用と判断するとしている。「固い印象を与える表現」という分析は、本稿の「かしこまり語」に通ずる。

敬語に関する解説も、「おられる」を問題のない表現と支持するものが少なくない。

小椋秀樹(2008)は「おられる」について、補助動詞「～ておられる」は尊敬語としてすでに広く使われていること、「おる」は室町時代から「ます」などを付けて相手に改まって言う場合に用いられるようになり、明治時代には「います」よりも丁寧な言い方として「おります」の形で使われていたことから、謙譲語Ⅱ(丁寧語)として使われるようになった「おる」に尊敬語「れる」を付けたものと考え、「おられる」は尊敬表現として問題ないとする。

坂本恵(2009)は、書き言葉では「いる(居る)」が「い」、「～てい」という連用中止形がとれないため「おり」、「～ており」のように「おる」が敬語的色合いなく使われていることから、「おる」は謙譲語というよりも書き言葉にふさわしい若干改まった語感を持つ語として用いられていること、「おられる」はその改まった語に尊敬語「れる」を付けたという意識があるとも考えられること、「いらっしゃる」では軽すぎると感じられかたい語感や改まった感じを出したいときに「おられる」が使われていると考えられることから、「おられる」は一概に誤りと言えないとする。また、「おられる」が誤りと考えられるようになったのは、「おる」は謙譲語であるという教育の結果、それを相手に対し用いるのは気になる、謙譲語に「れる」を付けて尊敬語にするのは正しくないとする意識が強くなったのではないかとする。「かたい語感」という分析は、やはり本稿の「かしこまり語」に通ずる。

「おられる」や「～ておられる」は、尊敬語を含むことから先行して受け入れられ、それを追う形で、尊敬語を含まない「おる」も(ただし丁寧語は含む)、固い印象をもたらす「かしこまり語」として現在徐々に受け入れられつつあるものと考えられる。

### 3.3. 運用面での誤用(1) 一学校の先生に対する敬語の適不適一

敬語表現の作り方という点では問題がないが、運用面で問題が生じるケースの一つとして、従来の運用基準からすると「尊敬語+丁寧語」が適切と考えられる相手に対し、「丁寧語」のみ、あるいは丁寧語すら付けないいわゆるタメ語(タメ口)で言うことについての許容者率を調査した。

質問文と選択肢は次のとおりである。動詞「来る」の動作主は、話し相手でもある「先生」とした。一般には尊敬語まで必要と考えられる状況であるが、丁寧語のみでも問題ないと考える回答者も少なくないと推測される。

なお、ここでの「いらっしゃる」は「来る」の意味であるが、1997年調査では提示する順番をこれと逆順にしたことから、そのことは回答者に確実に伝わっていると

考えられる。2018-19年調査でも、回答票の同一のページにこれらが並べられていることから、他の表現との関係で、回答者に意味が正しく伝わったものと考えられる。

- (ア) 先生、あしたは学校にいらっしゃいますか？  
 1. おかしい 2. おかしくない
- (イ) 先生、あしたは学校に来られますか？  
 1. おかしい 2. おかしくない
- (ウ) 先生、あしたは学校に来ますか？  
 1. おかしい 2. おかしくない
- (エ) 先生、あしたは学校に来る？  
 1. おかしい 2. おかしくない

(1) 「いらっしゃいますか？」

「いらっしゃいますか？」について、「おかしくない」と回答した人の割合を年齢層別に示したのが図 6-1、生年層別に示したのが図 6-2 である。

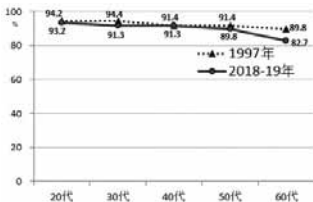


図 6-1 「いらっしゃいますか？」の許容者率 (年齢層別)

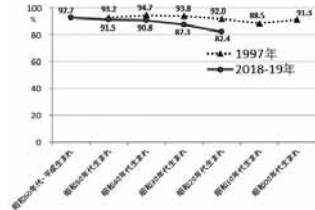


図 6-2 「いらっしゃいますか？」の許容者率 (生年層別)

図 6-1 により年齢層別に見ると、2回の調査とも、どの年齢層でも許容者率は9割前後と極めて高い。尊敬語と丁寧語の両方を含む形であることから当然の結果と言える。約20年の間、大きな変化もなく、高い許容者率が維持されている。

図 6-2 により生年層別に見た場合も基本的に同じである。約20年経ても、どの生年層でも高い許容者率が維持されている。個人の中でも基本的に変化がないことが推測される。

ただし、昭和20年代生まれでは、許容者率が1割ほど低下する。同様の傾向は昭和30年代生まれにも多少認められる。この昭和20～30代生まれは、先生に対する「おられますか？」の許容者率がこの間高まった生年層である (図 4-2 を参照)。「いらっ

しゃる」はその行為をする人物を高める表現であるが、それと同時に表現に柔らかさも伴うように感じられる。そうしたニュアンスを避け、むしろかきこまった表現とする方が適切であるという意識が、昭和 20～30 代生まれの一部に生じたことが、可能性の一つとして考えられる。これについても今後考察を深めたい。

### (2) 「来られますか？」

「来られますか？」について、「おかしくない」と回答した人の割合を年齢層別に示したのが図 7-1、生年層別に示したのが図 7-2 である。

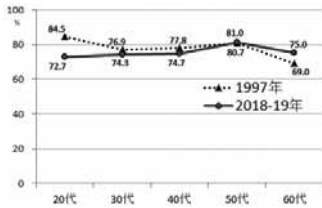


図 7-1 「来られますか？」の許容者率 (年齢層別)

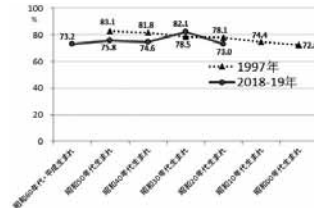


図 7-2 「来られますか？」の許容者率 (生年層別)

図 7-1 により年齢層別に見ると、先に見た「いらっしゃいますか？」と同様、2 回の調査とも、許容者率はこの年齢層でも 8 割前後と高い。尊敬語と丁寧語の両方を含むことからこれも当然の結果と言える。約 20 年の間、大きな変化もなく、高い許容者率が維持されている。ただし、「いらっしゃいますか？」と比べると、「れる／られる」という助動詞による軽い尊敬語であるためか、許容者率は「いらっしゃいますか？」よりも 1 割ほど低い。

図 7-2 により生年層別に見た場合もほぼ同様である。約 20 年経ても、どの生年層でも高い許容者率が維持されている。個人の中でも基本的に変化はないことが推測される。

### (3) 「来ますか？」

「来ますか？」について、「おかしくない」と回答した人の割合を年齢層別に示したのが図 8-1、生年層別に示したのが図 8-2 である。この表現は、1997 年調査で許容者率が年齢層により大きく異なる表現であり、その後の動向が注目された。

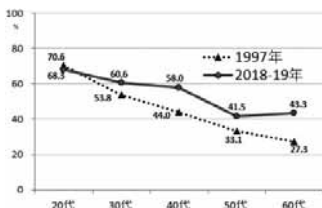


図 8-1 「来ますか？」の許容者率 (年齢層別)

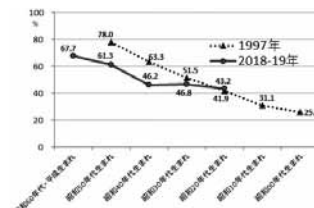


図 8-2 「来ますか？」の許容者率 (生年層別)

図8-1により年齢層別に見ると、20代を除き、1997年調査から許容者率が1～2割ほど増加する。また、若年層になるほど許容者率が増加する傾向は、2018-19年でも同様に見られる。

図8-2により生年層別に見ると、昭和40年代・50年代生まれでは、許容者率はむしろ減少している点が注目される。昭和30年代生まれにもその傾向がいくぶん認められる。すなわち、20代・30代の若い頃は、先生に対し「来ますか？」でも問題なしと意識していた人たちの中に、40代・50代になったときにそれは不適切だと意識が変わった人が一定の割合いたことが推測される。

つまり、先生に対する「来ますか？」は、図8-1の状況から、約20年の間に許容者率が確かに増加し、徐々にではあるが定着に向っていると考えられる一方、個人レベルで見ると、かつて若年層であった者がある程度の年齢に達すると、先生に対する「来ますか？」は不適切だと考える人が一定の割合生ずるといふ、社会の変化と個人の変化が逆方向となるケースである。たとえて言えば、下流へと流れる川の中に遡上を試みる鮭がいるようなものである。全体としては水が下流に流れているが、その中にいる鮭は上流に移動している。実時間調査で得たデータについてコーホート分析まで行なうと、このようなことが見えてくる。

#### (4) 「来る？」

「来る？」について、「おかしくない」と回答した人の割合を年齢層別に示したのが図9-1、生年層別に示したのが図9-2である。

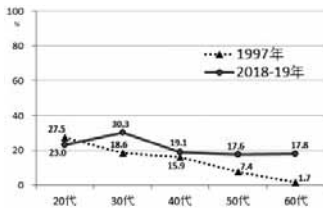


図9-1 「来る？」の許容者率 (年齢層別)

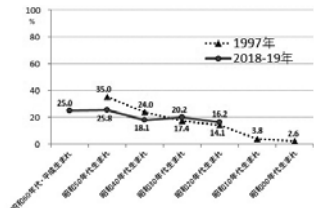


図9-2 「来る？」の許容者率 (生年層別)

図9-1により年齢層別に見ると、一部の年齢層を除き、1997年調査から1～2割ほど許容者率の増加が見られる。1997年調査では、若年層になるほど許容者率が増加する傾向が見られたが、2018-19年調査では明確な年齢差は認めがたく、どの年齢層でも許容者率は2～3割とほぼ一定している。

図9-2により生年層別に見ると、両調査とも数値が全体的に低いこともあり、大きな変化は見られない。ただし、昭和50年代生まれにおいては1割ほどの低下が見られ注目される。先に見た「来ますか？」と同様の変化、すなわち、かつて20代であった若年層が40代になったとき、先生に対する「来る？」は不適切だと考える人が一定の割合生ずるといふ、社会の変化と個人の変化が逆方向となる状況が「来る？」に

も見られることが推測される。

#### (5) 先行研究で得られた知見との関係

埼玉県にある大学で在大学生を対象に1992年・93年に調査し、女子学生63人の回答を分析した尾崎喜光(1994)は、先生に対する「(先生、お昼食べたらもう)帰る?」の正誤を求めた。「正しくない」と回答した人に対してはさらに修正を求めたが、全く修正のない回答者は皆無であった。修正状況から、少なくとも丁寧語は必須であると意識されているとする。当時は若年層の間でも、丁寧語すらない表現はほとんど受け入れられていなかったが、その意識は現在までも大きくは変わらない。

#### 3.4. 運用面での誤用(2) —ねぎらいの表現—

他者への配慮という点からいうと、敬語に連続する表現はさまざまある。語の選択だけでなく、何を述べるかとかどう述べるかなども敬語に連続する。それらを総称して「配慮表現」と呼ぶ。国立国語研究所(2006)は、そうした観点から多人数を調査した結果を分析している。

こうした配慮の表現のひとつに、ねぎらいの表現(慰労表現)がある。

他者の苦労をねぎらうわけであるから、その言語行動自体は問題ない。問題が生じるのは、それをどう表現するかである。

他者の苦労が話し手の益になる場合、とりわけ他者の行動がその人の任務の一環として行われたわけではない場合は、通常はねぎらいよりも感謝であろう。たとえば、会社で自分がしなければならぬ仕事があったが、体調が悪くなったため早退し、残りの仕事を同僚が代わってしてくれた場合、翌朝の挨拶は「ご苦労さま」等のねぎらい表現ではなく「ありがとうございます」等の感謝表現であろう。もし「ご苦労さま」などと言ったら、「お前は何かまだ」と思われるに違いない。

では、他者の苦労により話し手が益を受けるわけではない状況のときはどうであろうか。そのような場合はねぎらい表現であろう。

このような状況でときどき問題になるのは、「ご苦労さまでした」か「お疲れさまでした」かである。前者は、相手が苦労したことに言及した表現であるのに対し、後者は、苦労した結果疲れたであろうことに言及した表現である。自分よりも立場が下の者に対してであればいずれも言えるが、自分よりも立場が上の者に対しては、一般に「ご苦労さまでした」は避け「お疲れさまでした」と言うべきであるという規範意識が比較的広く共有されている。しかしながら、確かに相手は苦労したわけであるから、「ご苦労さまでした」で問題ないという考え方もありうる。この2つの表現の正誤意識はどうであるか、「ご苦労さまでした」を運用面での誤用と考える人はどれくらいいるかを明らかにするための調査をした。

質問文と選択肢は次のとおりである。

(20) 次のような場面を考えてください。

Aさんが会社で仕事をしているとき、同じ会社の目上の人が、外（そと）の仕事から帰ってきたとします。そんなとき、目下のBさんが目上の人にかかる言葉として、次の言い方はどんな感じがするか、ひとつずつ見ながら答えてください。

(ア) ご苦労さまでした。

1. おかしい 2. おかしくない

(イ) お疲れさまでした。

1. おかしい 2. おかしくない

### (1) 「ご苦労さまでした」

「ご苦労さまでした」について、「おかしくない」と回答した人の割合を年齢層別に示したのが図10-1、生年層別に示したのが図10-2である。

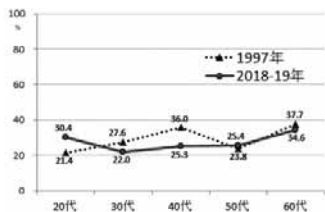


図10-1 「ご苦労さまでした」の許容者率（年齢層別）

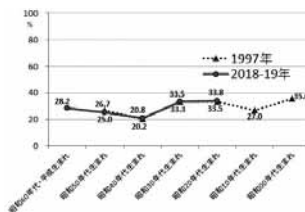


図10-2 「ご苦労さまでした」の許容者率（生年層別）

図10-1により年齢層別に見ると、全体的に大きな変化は見られず、許容者率はどの年齢層でも2～3割にとどまる。目上の人に対しての「ご苦労さまでした」をおかしくないと考える人は、約20年前も今も一定程度いるが、全体的には低い状態のまま維持されている。

図10-2により生年層別に見ても、両調査の数値はほぼ重なっており、この間の変化は見られない。社会全体として見ても許容者率は低い数値で一定しているし、個人レベルで見ても、許容者率が低い状態のままで変化した人が少ないことが推測される。

### (2) 「お疲れさまでした」

「お疲れさまでした」について、「おかしくない」と回答した人の割合を年齢層別に示したのが図11-1、生年層別に示したのが図11-2である。

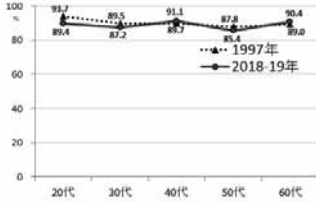


図 11-1 「お疲れさまでした」の許容者率（年齢層別）

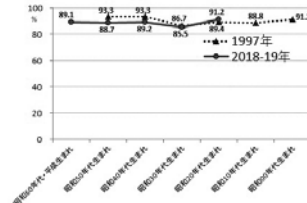


図 11-2 「お疲れさまでした」の許容者率（生年層別）

図 11-1 により年齢層別に見ると、全体的に大きな変化は見られず、許容者率はどの年齢層でも 9 割という高い状態が維持されている。目上の人に対しての「お疲れさまでした」をおかしくないと考える人は、約 20 年前も今も非常に多く、社会全体としての判断は安定している。

図 11-2 により生年層別に見ても、両調査の数値はほぼ重なっており、この間の変化はほとんど見られない。社会全体として見ても個人レベルで見ても、許容者率は約 9 割という非常に高い数値で安定している。

これら 2 つの表現についての約 20 年間の状況から、目上の人に対する「お疲れさまでした」は適切な表現として安定して許容され続けている。これに対し「ご苦労さまでした」を適切な表現と考える人は少ない。しかし、だからといって許容者率が減少するわけでもなく、低い許容者率のまま維持されている。約 20 年たっても大きな変化がないのが「お疲れさまでした」と「ご苦労さまでした」である。

### (3) 先行研究で得られた知見との関係

最上勝也 (1986) は、「御苦労さま」は目上の人が目下の者にかけることばであるのに対し、「おつかれさま」は目下から目上にも言えるとするともに、会社などで部下が上司に対し「おつかれさまでした」等と言うことにも抵抗感を持つ年配の人が多くとし、それは目上の人に対し労をねぎらうという習慣がもともと日本になかったからであろうとする。東京都での調査では、1 回目の調査の時点から目上の人への「お疲れさまでした」の許容者率は極めて高かったが、それ以前はこの表現の許容者率も低く、その後、限定された方向性が伴わない「お疲れさま」であれば目上へのねぎらい表現として受け入れられ、定着に向かった可能性が考えられる。

加治木美奈子 (1995) は、NHK 放送文化研究所が 1987 年に実施した調査から、目上の人への「ご苦労さまでした」を失礼だと思う人は 28%、「お疲れさまでした」を失礼だと思う人は 14% であり、「ご苦労さまでした」の方がより抵抗が大きいこと、しかしながらどちらも 7 割以上の人は抵抗を感じていないことを指摘する。その背景には、会社において人間関係をスムーズにするために親しみを表現したり、「ご苦労さま」と相互にねぎらい上下関係を越えた仲間意識を確認しあうという意識の変化が存在するのではないかとする。「ご苦労さまでした」に対しても 7 割以上は抵抗を感



じていないという点は、調査時期は30年後と異なり数値も大きく異なるが、許容者が一定程度はいる東京都での2回の調査においても同様である。

「ご苦労様」の許容者率については、他の地域でも似たような結果が得られている。山口市および宇部市の日本語教師養成関係の講座受講生計66人を対象に、「ご苦労様」と「お疲れ様」の使用についてアンケート調査した高石久美子（1998）によると、「ご苦労様」を下の人に使うと回答した人の割合は両市とも高い一方、上の人に使うと回答した人の割合は2割程度であること、「お疲れ様」は上の人・下の人両方に使う人が多いことを報告している。目上の人には使うべきでないと言われる「ご苦労様」であるが、全国的にもあるいは特定の地域でも、問題ないとする人は確かに一定程度存在する。

この2つの表現について、本来の意味という点から解説した北原保雄（2005）は、「御苦労様」は相手の苦労に対し労をねぎらう言葉であるのに対し、「お疲れ様」は疲れたと思われる相手に対しねぎらいの気持ちを表す言葉であることから、「御苦労様」は労をかける立場の人（目上の人）から苦労をした人（目下の人）に言うのが適切である一方、目下の者から目上の者へは「お疲れ様」（を丁寧に言った「お疲れ様でした」等）と言うのが適切だとする。「お疲れ様」の本来の意味が人々の間で希薄となり、単なる挨拶として用いている人も一定の割合はあるということであろう。

倉持益子（2011）は、「御苦労様」等の労い表現について、文学作品中での用例を調査している。それによると、「御苦労」系の表現は、江戸期の作品では主として目上に対し使われているが、その後は目上への使用の割合が減少するとともに目下への使用の割合が逆に増加して明治期はどの相手に対しても使われる表現となり、さらに昭和期の作品では目下への使用が最も多くなっているとする。長期的に見ると、「御苦労」系の表現は、目上への表現から目下への労い表現へと変化したことになる。このような変化が生じた理由については、明治以降の軍隊において、労いを表わす従来の「大儀」が侍臭を伴ったことから、これに代わる表現として「御苦労」系の表現が取り入れられ、これが徴兵男子を通じて国内に広まりつつあること等により、「もともと主君からの労いの言葉」という誤解が生じたのではないかとする。もともとの用法はどうであったかということについて、数百年という長期的スパンで分析すると、別の在り方が見えてくる。

最後に、最近の全国での使用状況を見てみよう。文化庁文化部国語課が2016年に実施した「国語に関する世論調査」では、職場の同僚（職階が上の人・下の人）に対する場面を回答者に想定させ、回答者自身の使用（最も多く使う表現）について回答を求めている。それによると、職階の上下にかかわらず、「お疲れ様（でした）」を選択した回答者が半数以上であった（文化庁文化部国語課2016）。これに対し「御苦労様（でした）」は、全体的に数値が低く、下の人に対しては28%、上の人に対しては9%にとどまる。なお、これより10年前に同様に実施された調査（文化庁文化部国語課編2006）と比較すると、下の人に対しても上の人に対しても、「御苦労様（でした）」の数値は減少している。現在、ねぎらい表現として使われるのは主として「お疲れ様（でした）」であり、下の人に対してであれば「御苦労様（でした）」を用いる人も一定程

度見られるという状況であるが、誰を相手にした状況でも、「御苦労様（でした）」の使用は衰退しつつある。東京都での調査では、回答者の使用ではなく適否を回答させたが、使用と意識（適否に関する意識）は連動する面が大きい。許容者率が3割前後にとどまるという東京都の結果は、文化庁文化庁国語課による使用に関する全国調査の結果と一致する傾向と言える。

#### 4. まとめと今後の課題

誤用とされる敬語についての正誤意識の変化を把握するため、東京都において、1997年とその約20年後となる2018-19年にほぼ同様の多人数調査を実施しその結果を比較した。分析で得られたおもな知見をまとめると次のようになる。

##### (1) 形式面での誤用—「御～する」のバリエーションを尊敬語の意識で使う誤用—

###### ①「ご卒業されました」

語形が謙譲語Ⅰになってしまう尊敬語としての「ご卒業されました」については、2018-19年調査によると、どの年齢層でも、またどの生年層でもおよそ8割が「おかしくない」としている。問題のない敬語表現としてかなり定着している。謙譲語Ⅰの「ご[卒業]する」ではなく、「[ご卒業]（を）[する]」という分析意識を持つ人がどの年齢層にも多くいることがこの背景にあるものと考えられる。

###### ②「ご利用できません」

2018-19年調査ではどの年齢層にも許容者率の増加が見られ、許容者率は8割前後となり、問題のない敬語表現として着実に受け入れられている。2回の調査とも許容者率は若年層に向けて高くなる傾向が見られることから、いずれは正しい表現として完全に定着すると考えられる。謙譲語Ⅰの「ご[利用]できる」ではなく、「[ご利用]（が）[できる]」という分析意識働いていることがこの背景にあるものと考えられる。

一方、コーホート（同時期出生集団）では大きな変化がないことから、個人レベルでは正誤意識が一定して変わらない人が多いと考えられる。

##### (2) 形式面での誤用—動詞・補助動詞の「おる」を尊敬語の意識で使う誤用—

###### ①「おりますか？」

許容者率に大幅な数値の上昇が見られ、どの年齢層でも4割前後となっている。その背景には、「おる」は動作主を低めて表現するというよりも、「いる」をかしこまって表現する「かしこまり語」と意識される傾向が強まりつつあるためではないかと考えられる。共通語としての「おる」に伴う「述べ方の硬質性」が許容者率の増加の背景にあるものと考えられる。

コーホートにおいても数値の大幅な上昇が認められる。ここから、個人レベルで正誤意識が変化した人が一定の割合存在すること、すなわち時代の趨勢に従う形で個人レベルでも正誤意識を変えた人がどの年齢層にも一定の割合いることが示唆される。

## ②「おられますか？」

2回の調査で数値に大きな変化は見られず、どの年齢層でも7～8割の高い許容率が維持されている。「かしこまり語」としての「おる」に尊敬語を下接した表現と見るのであれば、言葉の構成として問題なく、尊敬語のない「おりますか？」よりもむしろ適切であるという意識が、高い数値の背景にあるものと考えられる。

コーホートにおいても大きな変化はなく、どの生年層でも8割前後の許容率が維持されている。正誤意識が変化した人は少ないと考えられる。

## ③「来ておられますか？」

2回の調査の数値に大きな変化は見られない。補助動詞としての「(～て)おられる」は、以前から実質的に正用として用いられ定着している。補助動詞としての「おる」も「かしこまり語」と意識され、それに尊敬語を下接したのだから言葉の構成として何ら問題ないとする人が、本動詞に先駆けて多かったためではないかと考えられる。なお、許容率は2回の調査とも若年層に向けて減少する傾向が見られるにもかかわらず、約20年後の許容率は減少していない。このことから、「～ておられる」は、いつの時代でもある程度年齢が高くなってから使い始める人がおり、そのため当然許容もし始めるという加齢変化の要素も含まれている可能性が考えられる。

## (3) 運用面での誤用—学校の先生に対する敬語の適不適—

### ①先生への「いらっしゃいますか？」

2回の調査とも、どの年齢層でも許容率は9割前後と極めて高い。大きな変化もなく高い許容率が維持されている。

コーホートにおいても基本的に同様であり、どの生年層でも高い許容率が維持されている。個人の中でも基本的に変化はないことが推測される。

### ②先生への「来られますか？」

2回の調査とも、どの年齢層でも許容率は8割前後と高い。大きな変化もなく高い許容率が維持されている。ただし、「いらっしゃいますか？」と比べると、許容率は1割ほど低い。

コーホートにおいても基本的に同様である。

### ③先生への「来ますか？」

20代を除き1～2割の増加が見られる。若年層になるほど許容率が增加する傾向は、両調査に共通して見られる。

コーホートで見ると、昭和40年代・50年代生まれではむしろ許容率が減少している。若い頃は先生に対し「来ますか？」でも問題ないと意識していた人たちの中に、その後それでは不適切だと意識が変わった人が一定の割合いたことが推測される。

先生に対する「来ますか？」は、少しずつ定着に向っていると考えられる一方、個人レベルで見ると、社会の変化と逆方向への加齢変化も見られることが推測される。

#### ④先生への「来る？」

一部の年齢層を除き許容者率は1～2割の増加が見られ、許容者率はどの年齢層でも2～3割でほぼ一定している。

コーホートで見ても大きな変化はない。ただし、若年層であった者がその後、先生に対する「来る？」は不適切だと考える人が一定の割合生ずるという加齢変化も多少見られる可能性が考えられる。

#### (4) 運用面での誤用—ねぎらいの表現—

##### ①目上の人に対する「ご苦労さまでした」

全体的に大きな変化は見られず、許容者率はどの年齢層でも2～3割にとどまる。目上への「ご苦労さまでした」をおかしくないと考える人は、全体的に低い状態のまま維持されている。

コーホートにおいても変化は見られない。社会全体として見ても、そして可能性としては個人レベルで見ても、許容者率は低い数値で一定している。

##### ②目上の人に対する「お疲れさまでした」

全体的に大きな変化は見られず、許容者率はどの年齢層でも9割という高い状態が維持されている。

コーホートにおいても変化は見られない。社会全体として見ても、そして可能性としては個人レベルで見ても、許容者率は約9割という非常に高い数値で安定している。

以上の結果が得られた。

敬語の意識や敬語の使用は20年経過すると大きく変化するものがある一方で、ほとんど変化しないものもあることの一端を明らかにした。また、個人レベルで見た場合にも、変化する表現と変化しない表現があると推測されることも明らかにした。

引き続き継続調査を重ね、誤用とされるこうした表現の可変性や安定性をとらえ続けたい。

注1 文部省科学研究費補助金(創成的基礎研究費)「国際社会における日本語についての総合的研究」(略称・新プロ「日本語」;研究代表者・水谷修;課題番号=09NP0701)のうち研究班2の中の国立国語研究所チーム(チームリーダー・西原鈴子)の研究の一環として実施した。調査の企画・立案・実施は筆者が主担当となり行った。

注2 JSPS科研費JP18H00673(研究課題「共通語の基盤としての東京語の動態に関する多人数経年調査」;研究代表者・尾崎喜光)の一環として実施した。

#### 参考文献

大石初太郎(1986)『敬語』ちくま文庫

小椋秀樹(2008)「『先生はおられますか』のように「おられる」という言い方を耳にすることがあり

- ますが、これは敬語の使い方が間違っているのではないのでしょうか。」国立国語研究所編『新「ことば」シリーズ 21 私たちと敬語』ぎょうせい
- 尾崎喜光 (1994) 「若年層における「問題敬語」の規範意識」『阪大日本語研究』6
- (1999) 『日本語社会における言語行動の多様性』(非売品：内部資料)
- (2000) 「〔参考資料 2〕日本語の多様性に関するアンケート調査」『新「ことば」シリーズ 12 言葉に関する問答集—言葉の使い分け—』国立国語研究所編集・発行
- (2009) 『しくみで学ぶ！正しい敬語』ぎょうせい
- (2021) 「東京都における母親の呼称の時代変化と加齢変化」『清心語文』23
- (2022a) 「東京都における話し言葉の男女差の時代変化とコーホート分析から推定する個人内変化」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』46-1
- (2022b) 「4.2 日本人の敬語の誤用」荻野綱男編『敬語の事典』朝倉書店
- 加治木美奈子 (1995) 「「ご苦労さま」の使用にみる現代人の人づきあい観：「ことばてれび」視聴者の反響から探る」『NHK 放送研究と調査』45-11
- 北原保雄 (2005) 「お疲れ様・御苦労様」北原保雄編『続弾！ 問題な日本語—何が気になる？ どうして気になる？』大修館書店
- 倉持益子 (2011) 「「御苦労」系労い言葉の変遷」『明海日本語』16
- 国立国語研究所 (2006) 『国立国語研究所報告 123 言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版
- 近藤雅之 (2020) 「いわゆる「敬語の誤用」について—「おられる」という表現を中心に—」『語文論叢』35
- 坂本恵 (2009) 「謙譲語「おる」の丁寧語化」中山緑朗他編『みんなの日本語事典—言葉の疑問・不思議に答える—』明治書院
- 高石久美子 (1998) 「「ご苦労様」と「お疲れ様」の使い方について」『JALT 日本語教育論集』3
- 田邊和子・小池恵子 (2022) 「「～でいらっしやる／おられる」の使用における混合研究方法による分析」『国文目白』61
- 平井淑子 (1998) 「「敬語の誤用」—学生および社会人の敬語知識、規範意識に関する一考察—」『熊本大学留学生センター紀要』2
- 文化庁文化庁国語課編 (1995) 『国語に関する世論調査 [平成 7 年 4 月調査]』非売品
- (1998) 『国語に関する世論調査 平成 9 年度 [平成 9 年 12 月調査]』非売品
- (1999) 『国語に関する世論調査 平成 10 年度 [平成 11 月 1 月調査]』非売品
- (2004) 『国語に関する世論調査 平成 15 年度 情報化社会と言葉遣い』国立印刷局
- (2005) 『国語に関する世論調査 平成 16 年度 敬語・漢字・言葉の使い方』国立印刷局
- (2006) 『国語に関する世論調査 平成 17 年度 日本人の敬語意識』国立印刷局
- (2014) 『国語に関する世論調査 平成 25 年度 コミュニケーション・読書・言葉遣い』ぎょうせい
- (2016) 『国語に関する世論調査 平成 27 年度 コミュニケーションの在り方・言葉遣い』ぎょうせい
- (2020) 『国語に関する世論調査 令和元年度 漢字・言葉遣い・外国人と日本

語』ぎょうせい

最上勝也 (1986) 「くことば・言葉・コトバ」「ご苦労さま」『NHK 放送研究と調査』36-8

(おざき よしみつ／本学教授)

---

キーワード = ご～する、おる／おられる、かしこまり語、尊敬語／謙讓語 I、  
タメ口／タメ語、ねぎらい表現、ご苦労さま／お疲れさま

